

# The 83rd Annual Meeting of the Japanese Society for Hygiene

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/34844">http://hdl.handle.net/2297/34844</a>

## 『学会開催報告』

## 第83回日本衛生学会学術総会

The 83<sup>rd</sup> Annual Meeting of the Japanese Society for Hygiene

金沢大学医薬保健研究域保健学系

城戸 照彦

第83回日本衛生学会学術総会が、平成25年3月24－26日の3日間、金沢大学鶴間・宝町キャンパス、金沢美術工芸大学において開催され、550名を超える参加者がありました。

日本衛生学会は社会医学系の学会としては最も伝統があり、金沢で開催されるのは平成6年に岡田晃元学長が会長を務められて以来19年ぶり5回目の開催になります。

当学会は環境保健と予防医学を中心に広範な研究が展開されており、本学術総会のテーマは「生を衛る学問の使命－環境と暮らしの再生を目指して－」としました。

メインシンポジウムには「国際環境保健の動向」を配し、“Think Globally, Act locally”を率先して実践してこられた東京医科歯科大学公衆衛生学の高野健人教授を座長に、千葉百子先生(順天堂大学)「アラル海プロジェクトの経験から」、高正之教授(兵庫医科大)「中国における大気汚染の健康影響に関する疫学研究」、中村桂子准教授(東京医科歯科大)「フィジーにおける抗フィラリア薬地域一斉投与予防活動参加への伝統的村落集会の関与」、西条旨子准教授(金沢医大)「東南アジアにおける国際環境協力研究の経験」について講演されました。各シンポジウムは若手研究者が今後進めていく上での指針を実体験に基づき話されました。特に、PM2.5が社会問題化している中で、マスコミの取材も受けられた共同座長でもある島教授が「日本と中国両国の問題としてとらえ、対等な立場で共同研究を進めていくのが基本姿勢です」と話されたことは示唆に富む発言でした。

また、高田重男先生(金沢市立病院長)を座長に、シンポジウム「ホスピタリティ・アート“医学とアートの連携による病院における安らぎの空間の創出”」を市民公開講座・金沢大学創基150年記念事業として開催しました。患者だけでなく、医療者にとつての癒しの必要性、さらに米国では病院評価基準に採用されていることや、金沢市立病院・金沢美術工芸大学・金沢大学医薬保健研究域による「医芸連携」の実践例が紹介され、今後の発展が大いに期待されるようです。

さらに、シンポジウム「スーパー予防医学構想」が本学医学系の中村裕之教授、市村宏教授、篁俊成准教授等を講師に催されました。今後、千葉大学、長崎大学を含めた3大学による新たな予防医学の大学院を設置するキックオフとなる講演になりました。

本学会としては新企画のモーニング・レクチャー(教育講演)を、疫学については、三浦克之教授(滋賀医大)が「国民代表集団のコホート研究NIPPON DATA－その方法と知見－」、実験系については、松島綱治教授(東大)が「臓器線維化の分子・細胞基盤」を講演されました。NIPPON DATAは、長期コホートデータの分析を通じて、血圧、喫煙、血清コレステロール、糖尿病が循環器疾患死亡の強い危険因子であることを明らかにし、さらにリスク評価チャートを作成し、予測ツールとしての役割を担いつつあります。一方、松島教授は特発性肺線

維症や肝硬変の疾患の臨床や疫学から病理、さらに繊維芽細胞の起源に関する論争や線維化に關与する白血球と炎症介在因子について解説されました。いずれの講演も大変好評でした。

特別講演Ⅰは海外招待講演として「Obesogens, Stem cell and the Developmental Programming of Obesity」をProf.Blumberg(カリフォルニア大学.Irvine校)に講演して頂きました。環境中の化学物質、例えば、トリブチルスズを胎児期に暴露した場合、将来肥満を発生するリスクになることを種々の動物実験より明らかにした興味深い内容でした。

特別講演Ⅱは「放射能汚染の疫学研究 原爆放射線の健康影響」を小笹晃太郎疫学部長(放影研)に講演頂きました。福島における原発事故に伴う放射線の健康影響に対する貴重な研究がこの原爆放射線の長期間の疫学研究です。改めて、今日までに解明されている放射線の健康影響を明らかにし、今後の課題も合わせて示されました。

日本学術会議との共催で実施した合同シンポジウム「東日本大震災後の住民の現状と環境汚染物質リスク」では、福島県におけるヨウ素131の内部被ばくの状況や広野町における帰還住民が現在も1割に過ぎない現状、石巻市の大気総粉じんや三陸沿岸部の二枚貝中のPCBの環境モニタリングで一部高値を示す結果があるものの、おしなべて健康影響が出る計測値ではないが、今後長期の観測が必要であることが確認されました。

ランチョンセミナーでは、ベトナム資源環境省次官 Le Ke Son先生を招いて「ベトナムにおける枯葉剤/ダイオキシン類による環境・健康破壊」について、汚染の現状と海外との共同調査による汚染対策の取り組みが紹介されました。また、NPO法人禁煙ねっと石川の岩城紀男理事長による「禁煙ねっと石川の活動と石川県下の飲食店の受動喫煙防止対策実態調査について」の講演を頂きました。その他にも、子供の健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)に關連して、“Exposomics: To exposure or not to exposure, that is the question”や「低周波電磁界の健康リスクの評価－WHOの国際電磁界プロジェクトを中心に」が講演されました。

これ以外にも多数の連携研究会企画や口演94題、ポスター176題の発表があり、活発な議論が交わされました。

以上のように、学会は盛会のうちに無事終了することができました。これもひとえに十全医学会の先生方の格段のご指導とご支援の賜物と心より感謝申し上げる次第です。



総会の座長を務める城戸会長